

有機農業先進地視察 概要

1. 日時：令和4年8月22日（月）8：30～16：40
2. 場所：木更津市役所、有機米生産ほ場、道の駅木更津うまくだの里
3. 参加者：農業者9名、消費者1名、事業者2名、佐倉市教育委員会1名、栄養士2名、千葉県2名、佐倉市2名、事務局5名
オブザーバー：関東農政局4名、千葉県1名

4. 概要：

（1）木更津市における取組概要の説明（木更津市中央公民館6階第7会議室）

①木更津市農林水産課農林調整係長の司会で進行し、農林水産課長及び当検討部会部会長から挨拶の後、木更津市における有機米に関する取組について以下のとおり説明があった。

ア：有機米の生産に至るまでの経緯

- 平成28年に通称「オーガニックなまちづくり条例」、「木更津産米を食べよう条例」を策定。平成29年には、第1期「オーガニックなまちづくりアクションプラン」の策定や「地元野菜を食べて循環・学校給食プロジェクト」に取り組む。
- その後、市長からの指示を受けて、有機米の生産と学校給食への導入を実施することとなり、先進地であるいすみ市への視察や市の上位計画である「第2次基本計画」（平成31年3月策定）への位置づけを行った。
- 計画への位置づけと前後して、平成31年2月にはNPO法人民間稲作研究所の稲葉氏を講師に招き「地域の食と農を考えるフォーラム」を開催。
- フォーラムに参加した生産者の内、有機米の生産に興味がある方々に対して、市から生産への協力を依頼。翌3月には、稲葉氏によるポイント研修会も開催した。
- その結果、令和元年度は、5名の生産者の協力のもと、約1.8haで有機米を生産し、市内全公立小中学校30校で3日間提供を行った。

イ：令和2年度及び令和3年度の取組

○令和2年度

- －8名の生産者の協力を得て、約5.5haでの生産を開始したが、育苗方法の確立や雑草防除対策、収量の確保などが課題として浮き彫りになった。
- －雑草防除対策については、複数回の代かきや井関農機株式会社の協力を得た水位計の設置による徹底した深水管理などを実施。
- －メディアに対して、有機米の学校給食への導入を積極的にアピールするなど、ブランド化や食育の推進にも力を注いだ。

○令和3年度

- －12名の生産者の協力を得て、約15.4haでの生産を実施。
- －令和2年度に引き続き、栽培技術の確立に向けて、育苗方法・育苗場所の研究や代かき技術の習得、水田除草機の実証などに取り組んだ。
- －また、NPO法人民間稲作研究所の指導のもと、生産者、農業関係団体、市などを交えたポイント研修会を継続的に開催した。

ウ：令和4年度の取組予定

- 有機米生産の更なる推進及び有機農業の産地化を目指して、「みどりの食料システム戦略緊急対策事業（有機農業産地づくり推進緊急対策事業）」を活用。
- オーガニックビレッジ宣言に向けて、以下のような取り組みを実施予定。
 - －自校炊飯の実証
 - －ふるさと納税返礼品への活用
 - －有機米の収量向上に向けた実証
 - －市内有機農産物を活用した新商品の開発 など

②質疑応答（主なもののみ）

問：生産者1軒あたりの有機米栽培の平均面積はどの程度か。また、最も面積の大きい生産者はどの程度か。

答：1軒あたりの平均面積は2ha程度。最も面積の大きい生産者は約8ha。

問：JAの関わり方はどのようなものか。

答：有機米の買い取り、検査、精米、配送まで行っている。

問：慣行栽培を行っているほ場との間のトラブルや問題点・解決策などはあるか。

答：今のところ、トラブルなどは聞いていない。また、ラジコンヘリではなくドローンを使った農薬散布や畦畔を有機生産者側が管理するなどの工夫を行っているところもある。

問：有機野菜の給食への活用は。

答：現時点では、地場野菜の活用にとどまっており、今後、交付金の活用も含めて検討していきたい。

問：行政からの支援策の詳細は。

答：県事業を活用してポット苗用田植え機を2台導入したほか、市単事業で播種機の導入や苗箱の購入補助なども実施している。

(2) 有機米生産ほ場の視察（木更津市牛袋535地先）

○視察先のほ場で生産者から簡単な経緯や現状についての説明と意見交換。

- －有機栽培は、雑草との戦いで除草が大変という先入観があったが、NPO法人民間稲作研究所の指導に従ってやってみると、思いのほかうまくいった。

ー土壌の性質も抑草に関係しているようで、遊休農地はトロトロ層ができやすく向いている。

ー抑草手段の一つとして、米ぬか主体でできた抑草ペレットなどもある。

ー問題点ばかり挙げていても先に進まないなので、まずは1枚2枚からでも始めてみて、徐々に増やしていくのが良いのではないか。

問：肥料はJAから購入しているのか。

答：肥料はNPO法人民間稲作研究所のもの（主成分は大豆くず）を使用しており、昨今の肥料価格高騰の影響も特に受けていない。

問：経営面積全てを有機にすることはしないのか。（当該生産者は、4.5haのうち2.5haで有機米を生産）

答：畦畔の除草の手間などがあり、4.5ha全てを有機にするのは難しい。

【参考】

